



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学の事件は社会からどう見られているか : 「中間的な専門家」の必要性
Author(s)	榎木, 英介
Citation	科学技術コミュニケーション, 18, 109-115
Issue Date	2015-12
DOI	https://doi.org/10.14943/71596
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60399
Type	departmental bulletin paper
File Information	Costep18_11.pdf



科学の事件は社会からどう見られているか ～「中間的な専門家」の必要性～

榎木 英介¹

The Public View about the Cases of Scientists: Needs of “Intermediate, Independent Specialists for Science”

ENOKI Eisuke¹

キーワード：研究公正，科学事件，STAP細胞事件

Keywords: research integrity, science case, STAP cell case

1. 自己紹介

よろしくお願いいたします。肩書は近畿大学（以下、近大と記す）の附属病院の医師で、病理医なのですが、最近、研究倫理教育の担当になりました。火中の栗を拾った感があるのですが、なぜ私はここに立っているかというお話を、まずさせていただきます。

私はもともと研究者を目指していましたが、博士課程で辞めて医学部に入り直したという経緯があります。それで、医者になる勉強をしていたのですが、その過程とは別に、科学と社会の関係、特に研究者の、若手研究者の抱える問題について、

様々な場所でお話させていただいてきました。『日経サイエンス』（榎木 2002）や『朝日新聞』の「私の視点」（榎木 2001）、『Nature』の投書欄（Enoki 2001）などに意見が掲載されました。2000年代初頭に毎日新聞の『理系白書』に取材協力したりもしました。ポストドク問題を中心にいろいろ発言してきましたが、2006年ごろに研究不正が多発したときには読売新聞にインタビューをされたこともあります（榎木 2006）。次第にメディアに登場させていただくことが多くなってきていて、それで、私とメディアの方々とのつながりができてきました。



図1 講演の様子

2015年8月28日受納 2015年9月30日受理

所 属：1 近畿大学医学部附属病院臨床研究センター

連絡先：enoki@med.kindai.ac.jp

本も書いていまして、『失敗しない大学院進学ガイド』(NPO法人サイエンス・コミュニケーション・日本評論社編集部 2006)、これは今回のシンポジウムにも登壇されている南波直樹さんが登場しています。理化学研究所に勤めて1年ちょっとしたときに取材インタビューさせてもらって、理系の研究者を目指していたところから、広報に転身した経緯を書いてもらって、研究者の多様なキャリアパスの例として出させていただいたわけです。

近年は、事業仕分けといった、科学と社会における軋轢といった問題が増えているように感じますが、その過程でコメントを求められることも多くなってきました。偽iPS細胞移植事件¹⁾のとき、誤報を掲載した報道機関の一つ、共同通信から「共同通信が誤報を掲載した過程のどこに問題があったのか、意見を聞かせてほしい」と言われまして、それで少し意見を述べさせていただいたりとか、あるいは政権交代が起こったときに朝日新聞から「民主党政権の科学技術政策はどんなだったのでしょうか」と聞かれたりもしました。

このほか、単著の執筆の機会も与えていただくようになりました。『博士漂流時代』(榎木 2010)という、ポスドク問題などを扱った本で「科学ジャーナリスト賞2011」をいただきまして、あとは、『医者ムラの真実』(榎木 2013)という、医療業界の闇をあばく、というような、ちょっとセンセーショナルな本を出しました。これがSTAP細胞事件が起こるまでの私の活動でした。

2. STAP細胞事件への関わり

2.1 発表直後の動き

そしてSTAP細胞事件²⁾が発生しました。最初は、偽iPS細胞移植事件のときに関わった共同通信の記者さんに「STAP細胞報道の問題点は何か」ということを聞かれて、それでお話したのですけれども、一つの大きな転換点になったのが『毎日新聞』の3月19日の夕刊に出た「特集ワイド」という記事です。「巨額研究費、理研が落ちた「わな」」というタイトルで、事件発生の背景を掘り下げた記事です。毎日新聞では、問題の検証のために、科学環境部ではなく別動隊の混成のチームが作られていました。科学環境部だと研究者と気心が知れていて、追及の手が甘くなってしまうということで、このチームが作られたそうです。そのチームの記者の方から私にコメント依頼が来ました。私は研究予算についてコメントしました。今回の事件にはお金がかかる生命科学研究というのが背景にあって、それで、研究者たちは研究成果をアピールして何とか予算を取ろうとしているというような背景がSTAP細胞事件にはあるのではないのか、といったことをお答えしました。

この記事がきっかけになって、ほかの新聞社やテレビや何やらからたくさん取材が来ました。科学研究、とくに生命科学の現場にある問題を始めて知った、という記者さんも多かったです。そういうことをコメントする人は少なかったようで、それで取材が殺到したのだと思います。

正直言って、STAP細胞事件は数あるスキャンダルネタの一つだというのは自覚していました。タブロイド紙の夕刊フジ、スポーツ紙、フライデーなどからも取材依頼が来ましたが、タブロイド紙にとってSTAP細胞事件は佐村河内守氏の事件³⁾などと並ぶ一つのネタでしかありません。科学系の記者さんから取材を受けるときは、もっと深い問題に記者の関心があるな、というのは分かるのですけれども、でも、ここにニーズがあり、そしてチャンスもあると私は思ったわけです。「知りたい」という記者さんがいて、たぶんそれは読者がガチで知りたいからですね。それに誰かが答えてほしいと思っている、これはニーズです。かつ、私がいままでやってきたポスドク問題、科学と社会の関係、科学と政治の問題など、今まで私が発言してきた問題などを訴えるチャンスでもあるね、と思って、もう「えいや」と取材はほぼ全部受けることにしたわけです。

2.2 取材を引き受けた背景

その背景には、実は4年前の震災と原発事故の問題が私の心に突き刺さっていたということもあります。震災と原発事故はもちろん別なのですが、原発事故発生直後に非常に混乱が起きました。どれくらいの放射線量が人体に影響があるのかという問題は、研究者による意見の相違がありました。それくらい非常に不確実な問題でした。しかし、それこそ「人々がいま知りたい」という、そういうような状態がありましたよね。そのとき科学コミュニケーション関係者はその知りたいという人々の要望に応えられてなかった。私自身もそうです。

要望に答えていたのは、物理学者の早野龍五さんでした。震災直後の早野龍五さんのツイッターのフォロワーは、震災前まで私より少なかったのですが、この震災が起きた直後の数日間で15万人のフォロワーが出てきました。それくらい人が知リたかったという情報に、非常に解説をしたという、そういうニーズがあったところに応えたからこそこれだけ増えたのでしょう。

このころ科学コミュニケーションに対していろいろな批判がありました。かなり激烈なものがありました。覚えていらっしゃると思いますけれども、震災、原発事故にあたって「サイエンスコミュニケーションらしきアクティビティが感じられない」「自称サイエンスコミュニケーションたちが、やりたいことをやっているだけだろう」「こんなやつは必要ないよね」という非常に厳しい批判を浴びたわけです。それから、やっている、関わっている人たちでも庶民をばかにするというような上から目線の態度があったのではないかと、そういう指摘もあったりして、非常に科学を伝える人への不信というのは高まったという、そういう背景がありましたよね。

その震災の記憶が私に生々しくあったので、求められた意見には、やはり答えていなければならないと感じたわけです。もちろん、放射線の問題とSTAP細胞の問題は違っていて、STAP細胞があろうが、なかろうが、多くの人にとっては単なるネタでしかないでしょう。けれども、「知りたい」という欲求が高まっているとき、これは黙っていて良いのか？ と私は思ったのです。

2.3 バラエティ番組への出演

それで、いろいろな取材に応じていきました。至るところから取材があつて、民放は各局、NHKも含めてありましたし、新聞は、主要な新聞はほぼ全紙、それから、ラジオにも出演しました。あとは週刊誌ですね。週刊新潮さんが割と記事にしてくれました。それから、バラエティ番組の『ピーバップ!ハイヒール』⁴⁾という関西ローカルの番組にも出演しました。余談ですが、私が出演した回は6月に収録し7月に放送されたのですが、この時期はまだまだ疑惑の段階です。こんな時期にもうSTAP細胞をお笑いのネタにしてしまう関西のすさまじさを感じました。取材は1回だけ断っています。それは笹井芳樹さんが亡くなったときです。それ以外は無条件で取材依頼を受けてきました。

STAP細胞だけではなくて、医療問題に関してもコメントするようになり、バラエティ番組にも出演しました。『ピーバップ!ハイヒール』に二度目の出演をしたり、『たかじんNOマネーBLACK』⁵⁾という番組に出たり。芸能活動をちょっと楽しんだのは事実です。ともかくそういうニーズがあるというのに応えようとして、いろいろやってきました。

2014年7月には文藝春秋から『嘘と絶望の生命科学』という新書を出しました(榎木 2014)。執筆依頼のときに「3月19日の毎日新聞の「特集ワイド」読みました」と、担当になる編集者さんに言われました。あの記事の影響は大きかったんだなと実感しました。また週刊誌からの取材も多かったのですが、なぜか文藝春秋のライバル社、新潮社の週刊新潮からの取材が多かったですね。週刊文春には一度も出ていません。不思議なものです。

それはともかく、記者さんや、共演したお笑い芸人さんにいろいろ聞かれました。そのときにや

は「STAP細胞はあるの、ないの」と何度も聞かれたわけですね。あと「何でこんなことが起きたんですか」といった背景についてです。「ほかにSTAP細胞の事件のようなことはあるんですか」というのも聞かれたわけですね。あと、下世話な話では「小保方（晴子）さんと（故）笹井（芳樹）さんはできてたんですか」という、そんな答えられないよっていうのもありました。「どんな人ですか」といった小保方さん個人に関する質問もありましたけど、それは全部「知りません」とお答えしましたけど、そういうのは別として「STAP細胞あるんですか、ないんですか」も含めて、できる限り質問には答えようと思いました。

3. メディアでコメントをする難しさ

3.1 メディアと専門家のずれ

ただ、発言内容に苦しんだのも事実です。メディアはやはりスキャンダルの一つとして、ネタの一つとして小保方さんの問題を取り扱いたいわけです。また、STAP細胞事件は特殊な問題であり、科学の業界の一般的な話じゃなくて、小保方さんや理研があったから、特別な状況だから起きたのだ、話を広げすぎるな、という批判も多かったんです。私はなるべく研究体制の問題や、いままで取り組んできたポストクの問題、科学技術予算の問題など、もっと科学研究の構造について目を向けてもらおうと思って、発言はしてきたのですけれども、理研の野依良治理事長（当事）⁶⁾の責任など、批判を言わざるを得ない場合も多かったんです。メディアが求めている発言と言いたいことのズレは感じざるを得ませんでした。覚悟の上ではありましたが、

ところで、私のところにこんなに取材依頼が来たかということ、実名でメディアに出る人が少なかったからです。私や、中村征樹氏、東京大学医科学研究所の上昌広氏、広島大学名誉教授の難波紘二氏、大阪大学教授の仲野徹氏、京都大学の八代嘉美氏などが実名で取材を受けています。皆さん大学所属の人なのですが、この人たち、よく見ると、医者が多いですね。普通の研究者、現場の研究者が語っていない。医者じゃない方でも語っているけれども、ウェットなサイエンスしている、ピペットを握って日々やっている人たちというのは、なかなか発言がなかったというのはあります。岩崎秀雄氏を含めた一部以外は、なかなか発言がなかったんですね。それはやはり、組織に逆らえないというのがあって、逆らえないのではないかと。医者はその点、たとえ組織に逆らって辞めさせられても食っていくには困らない。しかし、医者ばかりが発言してよいのかという問題があります。

3.2 所属組織との関係

私はというと、確かに医者ですが、完全に自由に発言できたわけではありません。現所属の近大広報部の要望があって、理研と早稲田大学、その他をなるべく批判しないでくれ、という要望があったのですね。それから、なるべく一般論でコメントしてくださいという要望がありました。誰か個人を悪者にするのではなく、こういう問題が起こった構造的背景みたいなことを語ってくれ、ということをお願いされました。これは、私のやりたいことと合致していますが、前述のとおり、「理研の野依理事長の責任は」というコメントを求められると「あります」と答えざるを得なくて、要望を守るのは難しかったです。野依理事長批判を実名でした人は少なかったから、私はこれから理研とは無関係で生きようかなって覚悟を決めて発言していました。

実は、私はSTAP細胞騒動でメディアにコメントを述べている過程で、近大の広報戦略の一環に組み込まれました。皆さん、近大マグロってご存じでしょうか。近大は世界で初めて養殖に成功したマグロを販売してまして、非常にアピールしています。銀座にも店があります。このマグロを

含め、すごくアピールが上手な大学なのですね。広報戦略というのを非常にちゃんとやっていて、お金をなるべくかけずに広報していこう、メディアに教員を露出させようとしているのです。新聞に談話として使われ、大学名の露出が増えることを期待している。佐村河内事件のときは、メディアの「聴覚が回復することあるのか」という質問に近大の耳鼻科の教授が答えていますが、これも広報の紹介によるものです。例えば1時間のバラエティ番組に出ると数千万円の広告費を使ったのと同じ効果があるそうです。私が新聞や雑誌にコメントを多数寄せていることに気がついた近大広報部は、テレビ出演に広報部の職員を帯同させたり、コメントをチェックするようになり、広報戦略の一環として明確に認識するに至ったのです。近大のお勧め研究者10人に入れていただいたりしています。有り難いことです。

ただ、こうなってくると、非常に難しいのが、結局、大学の利益などと社会のニーズがバッティングしたときにどうなるのか、という問題です。近大で事件が発生したとき、私はどういう態度をとれば良いのでしょうか。非常に厳しい、キワキワの選択をしながらやっていかなければならないでしょう。私は大学を追われるのは別に怖くないです。医者なので、追い出されたら雇ってくれる病院もいま確保しているので大丈夫です。とはいえ、いろいろ問題もあるので。人々が知りたいこと、社会の利益と、自分の利益、あるいは所属機関の利益が真っ向から対立したときに、私はどうしたら良いのだろうというのを非常に悩んでいるわけですね。

4. 求められる中間的な専門家

科学の事件も含め、事件が発生すると人々はその背景を知ろうとします。それを代弁するのは、ジャーナリズムです。そして、事件発生現場に近いところで当事者としていろいろ発信するのは広報です。私や上昌広先生はその両者の間のコメントを求められる専門家であったわけです。ちなみに、上先生、先週お会いしたのですけれども、上先生はテレビなどに積極的に出演し、STAP細胞事件に関してコメントしてきたのですが、それに対し多数の抗議の電話が研究室にかかってきたそうです。私のところへはかかってこなかったもので、たぶん近大広報部が止めたのかなと思います。ちょっと近大に守られている感があります。それはともかくとして、ジャーナリズムが全ての専門性を持っているはずはありません。当事者に近いところの人々はなかなか言えない。だからこそ、何か問題が発生したときに「あれはどうなのだ」と聞く中間的な何かが必要なのではないか、と常々思っているわけです。研究成果を広報が発表し、それをジャーナリズムが取材して人々に伝える。でも、それから漏れてしまった重要な何かというのものもあるわけで、そこを拾っていくこの「何か」に関して真剣に議論する 때가来ているのではないかと思います。

米本昌平さんが、こんなことを言っています。

研究という基本的権利を、いまほとんどの人は職業研究者に託している。もしこの権利を個人が自ら行使しようとしたらどうなるか。科学のあり方、大学のあり方に根本的变化が生じてくるに違いない。(米本 1999, 54)

この種の個人の研究活動が組織化されれば、既存の権威を監視し、チェックする知的なNGO(非政府組織)として重要な社会的機能を担うようになるだろう。(米本 1999, 62)

この言葉は、私がNPOを作る動機になるなど、結構、刺激を受けました。こうした組織、あるいは個人はこれから非常に重要になってくるように思っています。

結語になりますけれども、中間的な団体がいいのか、それとも、はたして巨大匿名掲示場の2ちゃんねるのような、そういう匿名の集合知を活用するのがいいのかはまだは分からないのですが、そういう、事件現場とジャーナリズムをつなぐ中間部分、この「何か」を真剣に考えたいなとは思っているわけです。

そういう「何か」がないと、広報と報道の間に見落とされた問題点が素通りしていくのではないかと、ここを担う人材が必要なのではないか、とと思っているわけです。このプログラムで学んだ人たちが、もしそういうのに興味を持ったら、ぜひ挑戦していただきたい分野です。現実可能性などは、これから議論していきたいと思います。

「STAP細胞あるのですか、ないのですか」という、この問いを、馬鹿にしちゃいけないと思うのですよね。結構これは切実な問いだと思います。こういう問いを馬鹿にせずに、上から目線で論すのではなくて、泥臭く一緒に考えてみる、そういう人たちがこれからもっと必要になってくるのではないかなと思っています。

謝辞

メディアへの出演や取材等のサポートをしてくださる近畿大学広報部、及びサイエンス・サポート・アソシエーションのメンバーに御礼申し上げます。

注

- 1) 偽iPS細胞移植事件：ハーバード大学客員講師の森口尚史氏が、iPS細胞を用いヒトへの移植手術を行ったと発表した事件。読売新聞が2012年10月11日付の朝刊で大きく報じたが、その後誤報であったことが明らかになった。読売新聞のほか、共同通信、産経新聞、日本テレビもこの件を報道し、のちに謝罪している。
- 2) STAP細胞事件：理化学研究所発生・再生科学総合研究センター（2014年、多細胞システム形成研究センターに改組）に所属していた小保方晴子氏が筆頭著者とする研究グループが、2014年1月30日付のNature誌に2本の論文を同時に掲載し、簡便な方法を用いて作成可能な多能性幹細胞であるSTAP細胞（stimulus-triggered acquisition of pluripotency cells; 刺激惹起性多能性獲得細胞）の作成を報告したが、調査により、論文にデータ捏造、改ざん、盗用があることが認定され、これらの論文は撤回された。この過程で、論文の筆頭著者である小保方晴子氏の人となりやプライベートに関することなどが多数報道され、また、著者の多くが所属していた理化学研究所のガバナンス等に批判が集まった。責任著者の一人であった笹井芳樹博士が自死するなど、陰惨な結果をもたらした。この論文撤回事件に関して、論文の不正を最初に指摘したのが、インターネット上のサイトであったこと、小保方晴子氏の女性性を強調する報道がなされたこと、プライベートに立ち入る過剰な報道がなされたこと、理化学研究所の対応が後手に回ったことなど、多数の問題点が指摘されている。
- 3) 佐村河内守氏の事件：聴覚障害者であるとされる佐村河内守氏は、ゲーム音楽や交響曲第1番《HIROSHIMA》の作曲などで知名度が高かったが、これらの作品が、作曲家の新垣隆氏の手によるものであることが明らかになった。2014年2月に発覚し、大きく報道された。
- 4) 『ビーバップ！ハイヒール』：朝日放送、毎週木曜日11時17分から放送。お笑いタレントのハイヒールが司会を務める教養バラエティ番組。毎回一人のゲストが登場し、ドラマやクイズなどをあわせて、ゲストの専門領域に関する理解を広げる。
- 5) 『たかじんNOマネーBLACK』：テレビ大阪（すでに終了）。ゲストを数名呼んで、特定の話題についてクイズを交えてあれこれトークする教養バラエティ番組。
- 6) 野依良治氏は2015年3月に理研の理事長を辞任した。

●文献：

Enoki, E 2001: "Japan's funding cuts hit the future of science", *Nature*, 414, 485.

榎木英介 2001:「私の視点 安心して競争できる研究制度に」『朝日新聞』2001年10月20日朝刊,オピニオン面.

榎木英介 2002:「科学政策への注文 若手が生かされる科学のために」『日経サイエンス』2002年2月号, 117-118.

榎木英介 2006:「研究者自ら問題点語れ」『読売新聞』2006年9月10日朝刊, 科学面.

榎木英介 2010:『博士漂流時代 余った博士はどうなるか』ディスカヴァー・トゥエンティワン.

榎木英介 2013:『医者ムラの真実』ディスカヴァー・トゥエンティワン.

榎木英介 2014:『嘘と絶望の生命科学』文藝春秋.

NPO法人サイエンス・コミュニケーション・日本評論社編集部(編集) 2006:『失敗しない大学院進学ガイド』日本評論社.

米本昌平 1999:「知価社会を実現するために一投資としての研究・消費としての研究」『中央公論』1999年4月号, 54-63.

